

松井健さんを送る

菅 豊

松井さんと初めて出会ったのは、私が国立歴史民俗博物館助手だった1990年代前半のことだと思う。松井さんの先輩である同館の篠原徹（現・滋賀県立琵琶湖博物館館長）さんから、紹介されたことはまちがいない。その頃、気鋭の人類学者として名を轟かせていた松井さんに、私は最初からいきなり圧倒された。ただ私に限らず初対面の時に、松井さんの前で物怖じせずにいられる若手研究者はそうはいなかったはずである。

後に、私は松井さんを「知的マッチョ」と評したことがある。それはもちろんその身体的な逞しさを評したものではない。それは、松井さんの貪欲な探究心と、筋肉質の知識の逞しさを評したものである。その骨太の研究は、実は繊細緻密な論理構成によって支えられているのだが、そのような逞しくも周到な研究者に鍛えていただいた学恩に、まずは心より感謝するものである。

本号の巻末をご覧くださいればわかるように、松井さんの著作の数は夥しい。また、その研究分野はかなり幅広い。松井さんは独特の鋭敏な嗅覚で新しい問題を探り出し、果敢に挑戦してきた。その挑戦は先駆的であり、また反骨的でもあった。反骨という言葉が強すぎるならば、それは「あたりまえ」や「常識」を常に疑い、そのような既成の物事には容易に服従しないという研究者の気概と言い換えても良い。

周知の通り、松井さんは京都大学理学部、大学院理学研究科動物学専攻を巣立った「理学博士」である。今西錦司に流れを汲み、日本の生態人類学や霊長類学の礎を築いた伊谷純一郎の門下である。この門下は、ヒトを研究の土台とする生態人類学と、サルをその土台とする霊長類学とを渾然一体として発展させてきており、松井さんも同門もその両者をともに学んでいる。そうはいうものの、当然だが、やはり最終的にはどちらかの学問にスペシャライズされ、落ち着いていく。松井さんはヒトを土台とする研究をなさったので、大きな意味で生態人類学の道に進まれたということがいえるのかもしれない。

しかし、松井さんと同じくヒト研究に向かった同門の方々の多くが「生態人類学者」を自負し、またそれを自然と名乗ってきたのに対し、松井さんは、自らを「生態人類学者」と位置づけることを拒んできたようである。当初、文化人類学を専門として名乗ることもあったが、後には意識的に自らの学問を「人類学」と称するようになった。それには人文・社会科学や自然科学に跨がりながら、幅広い視野で物事をとらえようとする松井さんの研究者としての矜持が示されていると思うのだが、さらにそれとともに、同

門ということではなれ合いになりがちな学問社会には与しないという気骨が示されているようにも感じられる。この他人と同じことをしない、また習い性を疑ってみるという反骨性は、彼のフィールドワークや研究方法、そして研究内容にも如実にあらわれている。

たとえば、松井さんは1980年に『パシュトゥン遊牧民の牧畜生活——北東アフガニスタンにおけるドゥラニ系パシュトゥン族調査報告——』を上梓しているが、この青年時代の調査フィールドは、タイトルにあるように北東アフガニスタンであった。すべてではないにしろその多くがアフリカニストを自負し、アフリカ学の構築のために集合していた当時の伊谷門下にあつて、若い頃にアフリカ以外をフィールドに選択したものはそうは多くないのではなからうか。ましてや松井さんはアフリカでの調査経験は豊富なものの、アフリカニストと称することを避けているようなふしもある。それは、自身の研究を地域限定の研究に押し込めたくないという意志のあらわれであるとともに、身の回りの仲間とは一線を画するという反骨性のあらわれでもあつたのではないだろうか。

また、松井さんの初期の研究で特筆すべきものの一つに、認識人類学(cognitive anthropology)の考究がある。アメリカでH. C. コンクリンたちが開花させた研究方法に松井さんは先駆的に取り組み、フォーク・タクソノミーやエスノ・サイエンスなどの研究手法や思潮を日本に体系的に伝えた。松井さんの仲間たちの多くが、生態学的手法の「計量」を主たる手法としていたのに対し、松井さんは「分類」に着目して「認知」という計れない側面を検討する手法を選択した。そしてメタ理論的な手法を、自然と人間の関係を考究する人類学の分野に導入し、日本の(文化)人類学界に大きな方法論的インパクトを与えたのである。これもまた、松井さんの反骨性が生み出した大きな成果である。

松井さんの「あたりまえ」「常識」を疑った研究のなかには、常人がなかなか思いつかない、あるいは容易に組み立てられない数多くの斬新なアイディアが鑲められてきた。それは読者の目から鱗を落とすアイディア群であつた。

たとえば、ヒトと自然の関係史をこれまでにない視点でとらえ直した「セミ・ドメスティケーション」という仮説。1980年代末に松井さんによって提示されたその仮説は、従来、考古学や育種学、遺伝学などで、家畜や栽培植物の起源を探ることに力点が置かれていたドメスティケーション研究に大きな一石を投じた。ドメスティケーションは数千年前、いや一万年以上も前にスタートした歴史的現象である。当然、それを知るために、その方面の研究は遺跡や遺物、そして生物の遺伝そのものを主要な研究素材とし、それによって仮説を構築してきた。松井さんは、このような歴史学や生物学の知見も積極的に取り入れつつも、人間を扱い、その生活様式の展開を人類学的な現在主義—民族誌的情報の重視—でとらえ直した。ただし、誤解がないように一言述べておかなければならないのであるが、そのような現在主義によって、考古遺物の解釈のために単純に現在の民族誌的情報を外挿したのではない。人間の長い年月の営みをモデルとして再構成するという、あくまで「思考実験」として試みられたのである。それは「いつ、どこで」

という問題究明に偏りがちであった当時のドメスティケーションの議論に、「なぜ、どのように」という肝心要の本質的な問題究明の必要性を強く訴えるものだった。この仮説は、ドメスティケーションの理論としてばかりではなく、現在学としての人類学をメタレベルの思考実験という形で歴史的世界に応用した点で、多くの研究者の目から鱗をばろばろと削ぎ落としたようである。

さらに、松井さんが生み出したインパクトのあるアイディアに、「マイナー・サブシステム」という概念もある。それは「いつも、集団にとって最重要とされている生業活動の陰にありながら、それでもなお脈々と受け継がれてきている副次的ですらないような経済的意味しか与えられていない」生業活動で、「たとえ消滅したところで、その集団にとっても、当の生計をとともにする単位世帯にとっても、大した経済的影響を及ぼさないにもかかわらず、当事者たちの意外なほどの情熱によって継承されてきた」（1998「マイナー・サブシステムの世界」p. 248）生業活動を意味する。このアイディアの重要性は、ヒトと自然との伝統的な関係に関する研究を、「量から質へ」と転回させたことにある。加えてその転回が、現代の労働論や環境論に大きな影響を与え続けていることにある。

松井さんも学んだ生態人類学は、計量的研究によって従来の定説、イメージを覆してきた。たとえば、狩猟採集民は劣悪な環境下、プリミティブな技術しか保持せず、不安定な生活を余儀なくされていたというような、ステレオタイプ化した生活様式像があたりまえのごとく流布していたが、しっかりと計ってみると、労働時間や摂取エネルギー量の面から意外なほどの豊かさが実証的に明らかにされたのである。「貧しい生活像から豊かな生活像へ」——それは、いまではあたりまえのこととされ、日本の考古学なども縄文社会像の修正作業において、大いに感化されている。ただし、その豊かな生活像はおおむね食糧などの資源量や、労働時間、労働量などのコストといった計れる量的価値によって説明されていた。一方、松井さんが明らかにした豊かさは、楽しみや喜びといった情緒性や、誇りなどの威信性、そして深く体感される身体性などの多様な質的価値に裏打ちされた豊かさであった。「貧しい生活像から豊かな生活像へ」というイメージの転回を、さらに松井さんは「量から質へ」という思考の転回によってひっくり返して見せたのである。このマイナー・サブシステムという概念は、伝統的生業の再解釈を行った民俗学や、地域の環境保全やその保全と密接に関わる人間の営みを考察した環境社会学などの分野において未だに参照され続けている。

松井さんが生み出した多彩なアイディアと枠組みは、さらに枚挙に遑がない。生業論、環境論、遊牧論、沖縄研究……そしていまでは民藝論にまでその研究は及んでいる。そのすべてを総覧することは、この紙幅をもっては不可能である。松井さんは、このたび東京大学を退かれるが、当然、これからも研究活動から退かれることはない。まちががなく、これからも逞しく、かつ研ぎ澄まされた研究で、私たちを戦慄せしめるであろう。私たちは松井さんの今後の研究に、刮目し続けなければならない。